



へ13
3141
1-10
お



雙蝶記 自序

双蝶記稿を讀みて人の叙城とんと功と。かゝる

讚てくれる人もあるまいと。たれまぬ前々

とんと功のふらん城漢文ののれ。之字者也の置

弱のと面例をる。書得一肝が餅の餅のあ

柏餅皮があらとて味ありといふむこれと和文

一ツ城論を多々之過去未来現在を三世因果

浄琉璃節は改るやうに改むるに世間旧男

ならん。蟹の甲は氷せて穴、さる世間旧男

字城録として。此草紙城城とたづぬ婿



附てりか

書名或雙蝶記と号由多ハ二ツ蝶ころん傀儡乃戯曲小のりてつとど
なる。ある者夏のまごうたるぬ。職務の離のうち或行雁の音をのりて。
かち、或はざるが如くを且。まごの名とあるよづる者。常言小を言似る
安貝ハリも実ハ似るを言ハリ。小を言と。いも人。或証。或いふを
此草紙小なる。地名年月日時人の姓名乃た。ひ都て。と。あ
小安貝。或も。た。多。古。人。乃。名。小。似。か。ま。る。も。あ。且。ど。そ。ハ。唯。假。用。さ。る。の。ミ
た。且。ハ。實。記。小。な。り。た。が。小。夏。も。不。見。む。人。と。且。或。い。ふ。と。ろ。れ。素。童。或
か。と。あ。む。の。り。た。れ。俗。耳。小。記。雅。言。と。好。也。無。下。ハ。或。記。言。或。を。志。し。語。勢
と。り。と。ま。れ。バ。て。小。ハ。と。誤。し。と。も。不。る。と。た。多。手。な。り。雅。言。と。り。或。戲
曲。の。文。或。す。ぬ。と。え。為。り。唯。勸。懲。の。意。旨。或。り。或。い。ふ。或。微。意。と
さ。る。の。ミ

○燈臺鬼

源平盛衰記十卷之云昔輕大臣の遺唐使に渡されて。形と他州と
や。此。就。燈。臺。鬼。と。か。さ。り。或。夏。を。得。り。多。子。息。彌。宰。相。其。向。後。覺。東
る。大。唐。國。小。渡。て。た。づ。ぬ。と。も。く。目。の。前。小。有。る。明。と。り。の。あ。り。な。り
た。父。子。を。見。知。け。角。と。い。ふ。物。の。あ。る。藥。を。の。り。と。り。症。と。り。た。れ
た。り。た。と。り。額。と。燈。械。を。打。ま。け。宰。相。と。向。て。只。位。と。外。の。位。也。
宰相ハ。或。は。た。れ。父。の。後。を。面。を。並。て。さ。り。り。り。燈。臺。鬼。涙。を。流。し。け。
指。端。と。食。切。て。其。血。を。以。て。宰。相。前。に。角。と。書。連。々。

我元日本華京客

汝是下家同姓人

為子為翁前世契

隔山隔海戀情辛

經年流淚蓬蒿宿

逐日馳思蘭菊親

形破他郷作燈鬼

争歸舊里寄此身

と書わらへし一り多ふこそ宰相の我父の輕大臣共知れ云々

是正史實録小見えんばと云々盛衰記下学集等又載されど云々

傳されまじし。和漢三才圖會小此故事と記て大臣の歌と載

燈の影取しき身なりと云々

大臣の子の名一決せん。時代も詳し然れども河州古市郡は輕之墓あり

和州高市郡は法輕寺あり。丹波の桑田郡は輕神社あり。皆輕大臣の名と

立り。但皇極帝の弟宮は輕皇子あり。是乃孝徳天皇也。其外輕と稱る

名と云々以上和漢三才

此双蝶記卷之第四。右燈臺鬼の故事は據て作らる。故に左に其圖

と出せり。大臣の子と少年の児姿は画するへんかきそと云々



輕大臣の燈臺鬼之圖

相摸入道家臣
大佛九郎貞直

法師
寐蓮



下常志むまぶ
おろしもみまを
おろしもみまを
おろしもみまを
法師乃月

良等
鬼淵
劍大



翠鳥
なぶ
らまら
村
雀
嵐雪

聚、噪、斜、陽、
外、群、飛、暮、
雨、中、
雀子や何より障子の
篋乃彩
其角
娘
小蝶

鎌倉小動村
竹興塵兵衛妻於破矢

又柴巴夫



洛外北
岩倉の
浪人
竹
右衛門

奴僕
露助



都五茶坂遊君
富士屋吾妻

菜種
友人
山月庵
古柳
蝶のわんま
や
心
北

洛外山崎
油賣
餘五郎

茶種油



浴外八幡村
南方十宗兵衛兒子
南餘兵衛

萬物
已知春

一喜
隱
出地
森
出地

一子窗太郎

有明
宗因



此南元
波右衛門兒子
蝶吉後
動之助氏邦と更む
鎌倉蛇ヶ谷
因果婆々

浪人
尾賀
堂左衛門

雙蝶記總目錄

卷之一

一 夏草やつりののどきの

二 ひざんやか焚れ中

三 花ふとと開かそあ

四 かせ管箏に羨ましくして

五 久月毎やあゝあひそふ

六 陽をを志たりよねふ

七 木枯の果をりりり

八 我雪とれりハハハ

九 露層と見捨て

十 白露や喜分別なる

卷之二

卷之三

卷之四

夢路の 落人 計畧 懺悔 老女の 懺悔 身賣の 愁歎 遊偵の 曲者 牡丹の 睡猫 記念の 竹刀 身受の 千金 胡蝶の 狂乱 性命の 質物



亀毛川鵜養雨作

村婦篝火

村婦

篝火

鶏

舟

芭蕉

五卷之

六卷之

- ① 紫丸 ありあり
- ② 空錢のろき 世にあらむ
- ③ きつろき 髪をまき
- ④ 燧 燧 燧 燧
- ⑤ 宿 宿 宿 宿
- ⑥ ねりろろて 頓てあき
- ⑦ 鶴とりて 目そおむ

通計十七回

池辺の盗人
主人の合カ
茂林の闇打
野宿の妖怪
化石の鍋蓋
鶴養の腹切
和睦の酒宴

總目錄終

雙蝶記一名霧籬物語卷之一

江戸 山東庵京傳編

一 夏草や兵ども此夢路の落人

往時元弘三年夏草の露と消ぬ一夢の跡憂世語を殘し
相摸入道宗鑑が二男相摸次郎時行へ一家亡後へ天高
くとも 踏地廣しとくとも 跡しとくとも 一身とおく小安き
信濃國小隠遁し深山幽谷のうらみ 髪しとくとも 再天日
と見る代もがかと 時節と待て居りし頃 日南北兩朝
あふと聞てひそく小強者と吉野の皇居よまわすや 奏し
亡親高時臣とれ道と辨どしてつひ滅亡と勅勘の下ふ

とくども、天誅の理ありけるゆゑと存するに依て。時行一塵も忍ぶ
恨に奉る如く存す。天鑒わさるる下情と照し、自ら枉く
勅免せらるる。宜官軍の義戦と扶け、皇統の大化を
あふまひべしと委細奉奏し、召されし。主上こそと聞し、召さ
不義の父と誅し、忠功の子と召仕例されし。あつて討其罪
あり。賞其功、感されし善政の最なりと。則恩免乃綸旨の
文と。日月打する錦の御旗の裏、あはれし。そよぬりたる。ひくく延文
四年二月乃ち。時行信濃國信和の城、あつてこり。此彼、あつて
ひそめ居る。平家の餘類を催し、よりたる。年箱根の水、飲
峠の合戦、あつて打し、子と打し、ひくく。ひくく。宿望、よりたる。
ひくひくと喜ひ、あつて馳集る兵、九七千余騎と。こころえられし。

鎌倉は急と告ぐ早馬。磯打波のひまられ、こころ。磯打手のあつて不
似たり。これよりして、鎌倉の管領諸將、あつて軍略、あつて議せ
られし。これよりして、送寄し、其不意と攻、銳氣と控、荒肝と接
ふ。あつて軍議、あつて決し、月影、あつて谷の判官、あつて影と大將と。あつて
鎌倉勢、あつて一万三千余騎。日、あつて信濃國、あつて宮形、あつて馳著、あつて戦、あつて前
みと、あつてんぞ蹄と、あつて勇騎、あつて後、あつて隊、あつてして、あつて唐と、あつてひくく。軍旗と、あつて翻し。
金鼓と、あつてし。関を、あつて噓と、あつてぞつ、あつてる。城中、あつて敵、あつて不意の、あつて送寄、あつて
軍慮と、あつてし。術計、あつてい、あつて十分、あつてふ、あつてその、あつてを、あつてし。累年、あつて憤積、あつて
して、義心、あつて金、あつて鉄の、あつて下、あつてん、あつて兵と、あつても、あつてれ、あつてば、あつて更、あつて小、あつて臆、あつてする。氣色、あつても、あつてなく。
変、あつてふ、あつて志、あつてして、あつて進、あつて退、あつて度、あつてと、あつて失、あつてい、あつてど、あつてか、あつてり、あつて叫、あつてひくく。攻、あつて戦、あつてひ。射、あつてり、あつてあ、あつては、あつて箭、あつての、
夕立の、あつて軒、あつて端、あつてと、あつても、あつてる。音、あつてより、あつても、あつて猶、あつてま、あつてびく。打、あつて合、あつて太、あつて刀の、あつて鏝、あつて音、あつてへ、あつてし、あつて

応る山彦の鳴やむ隙もあがり多。爰ふ故相摸入道の家臣小大仏
 九郎貞直しよりのあり。前年敵とあざむいて一旦鎌倉とのり出
 相摸次郎とりのぞて始終とるれど今へをふ年五十歳小道
 ぬれどもカ景正義まもく滅せどもか當城ありたるが此とて唯
 一騎城とて遠くも連れて敵陣ふ馬とせり。鎌倉勢の總大将月影介
 谷判官とらうと打合せをとりとらうるへ大膽不敵のあまきか
 なる。敵兵ふまだきとやと。兜と著せ白綾の鎧巻して乱髪と
 顔ふ颯と振うけ白糸威の鎧のふ雲鶴の地紋あは丹地の錦
 の陳羽織を着し青鈍の大口とせり。其鎧の太力小豹の皮の尻
 鞆うけし。金作の小太刀と帶副大長刀と右の小服ふ引せをり
 白尾毛の馬の太逞く螺鈿の鞍と置燃立をり。厚徳乃

鞆とけてぞふよりなる。かくて鎌倉勢のむらぐれ中へまがせし。東
 東西をそりひ南北へ追まへ。黒煙を立て切てまへに寄手大勢
 ありとしと。唯一騎ふ切立てて四方へ颯と引たる。大將
 のわたりへちづくとあざむいたむ。むかひくものれも和具麻川のころふ
 まを引退さ。手綱ひひりつ。早咲の藤波のわまる松蔭小汗馬
 とよせて息とやま。乱まると髪と押わけて城の方とくるとれ。ひ
 ぶふの山間ふ白旗赤旗へらくの旗春風ふひるぐりて雲より落る
 花の波霞よまがひくもさる。貝鐘太鼓颯波いとぬひとくはへり。
 敵の敵城辺ちり寄りうとあざむく。わか氣づくとありし。雑
 兵二人貞直が妻女更級といふつとこひ。此とらまで落来。乃
 つひと。敵兵一の木戸と打やがりて城中へ攻入ゆゆ名。御懐胎乃

内室とこれを湯供のしりひとりのた。更級もいづく。妾懐胎の身は
あつひん。女かづも敵にむくく一方とふせぐべされ。どうわーを
産月あれ心へ矢猛よとやりとぶきと。月のさきき自由なうも。
彼等小技られて。とあく。逃足とどせし。ちとしひとりの。大仏
九部これとまて打撃た。さてつよく味方の安危をありき。我を
これより城中へひたし。今一軍して敵兵とおひえんとしひを。
馬とせんとし。更級へ此とた急小産のけつとがれた。彼方も
全氣つひ。此方もさきふ見さくぐく。馬とせんとて。危うきけり。
此処へもて墓原ゆく。辻堂一つあるのさあれた。雑兵もに下りて。
更級と辻堂小とけゆる。堂中の額をふさる。不意地。地蔵菩薩
とくたつた。これ産所。幸ひの表事とあら。地蔵菩薩

十種の福と得せし。あふちち。一者女人奉産と。地藏経のさあれた。
佛前と穢し。もさきでゆく。あふちち。堂前小権の板と敷か。
案山子の。蕞ととり来り。其上小志さき。更級ととりし。
鰐口の鉦の緒と産綱と。なと。雑兵と腰抱と。おのれも
かろふありて。介抱を。一人の雑兵と。さき。さき。
さき。胎衣桶へいづく。あ。鯉節へいふ。産湯へいづく。
ゆく。煖も。馬盤と。てあり走り。走り。
貞直へ。奴。人家小遠。世辺。戰場。
いう。自由の。さき。川水と。来。所。
産婦。ふ。か。陳鐘太鼓の音。矢叫軍陣の。
知具麻川の漲る音。小ひ。へ。更級の

志心こころをく。とくくやとて産う多おほかり。ひるとりも郎らう号ごう魚ぎよ淵えん劍けん太た
 との者もの汗あせもあど小走来こぞき。歩あゆ註進しゆしんつゝらると呼より
 れた。貞直まことこれとききていそぐ。極たぎ子こいふとく人ひとと氣きとせけん。
 劍けん太たの息いきもつきあんど。されば敵てき兵へいも小城中こじやうちう不攻せありりいんとも。
 味方あじかたの兵へい命いのちと惜おぼまむ。二の木戸きどもふせだ戦たたかひひ。いまはひもつら
 ざらうらふ。この産婦さんぶ息いきもあけいといやま。体ていまれば貞直まことの
 かみと聞ききして。産婦さんぶの背せ中ちゆうと極たぎさとり。折より時ときもとれとそ此
 産氣さんけ催生そせい葉はぶらうりぬ。戦場せんぢやうの火急ひきうの節せうさむり心弱こころなて
 産得うしま。おん月つきの常つねの女をんな似にむ。日來ひら雄ゆうく心こころよりして男おとこま
 里さとの女をんなふ。四十歳しじゆうさいまでてのうら産さんとふひあぐ。かどてさばら
 んよとれだ。自みづから氣きとたげまて。とく産うとひく介抱かいぶりてふふ

むひ。シテ其そのあといふく。問とくまむ。劍けん太たの汗あせとのひつま
 つゝら。今いままうせ。とくやて。雌雄おしゆういま決けつせむ人ひとも味方あじかたの心こころと
 きりめて戦いくさの引鐘ひきかねと聞きて。怒いかり。とむ太鼓たいこと。うらうら。勢いきほ官くわんて
 金の鼓かねのこの声こゑも濁にごして。聞きへ。勢いきほひる。告つるあぞ。貞直まことの
 やうく。色いろとありて。うらうら。劍けん太たの。拙者せつしやへ今いま度たび走はり
 て極たぎ子こと見みとけ。再また又また歩註進あゆしゆしんつゝら。うら。のひもそ。極たぎが。とく
 走去そくぬ時ときふ。又また陳鐘太鼓ちんしゆうたいこと乱調らんぢやうふ打うちり。と。嚏はなと。わけ。觀かん波は
 天地てんちも。うらうら。産婦さんぶの。これ。氣きの。うら。うら。あや。と。叫こゑ
 勢いきほひ。ふ。子こ。ぶ。ら。う。り。て。産う。か。う。う。あ。れ。り。ふ。産う。声こゑ。と。む。げ。ま。う。も。男おとこ。子こ。の。あ。り。ま。れ。た。貞直まことの。味方あじかたの。勝利しょうりの。註進しゆしんと。う。う。ふ。此この。安産あんさんの。あ。ま。と。轉ま

又生示の二六二

二五



又世不...

六



又虫言卷之一

六

森のうらやう。弦音よく漂とひたれ。一筋の箭飛来り。うらやう
 松の木ふらうしと立ぬ貞直これと屹と見らふ。これ矢文うりけき。ま
 馬ととく矢とぬきさう。結ひつけらる文とひきと。讀よりイ打らる。ま
 卷おらんともうらやう。忽一陳の颯調と吹来り。地をさうさく砂と
 飛。かの文と虚空なるふ吹とりた。其あも依るま行んし。ま
 とりし。鎌倉勢又颯波と噴らる。四方より馳来り。貞直と
 取らる。我討らんと競り。貞直これとて呵と打らる。ひ
 今下らる。どの葉武者とも。我と打んと寄来り。夏の虫煽と惹て。
 らう。焼と異なり。ま。汝が骨のり宿せる魂ども
 と。我此大刀の下に追出して冥途へま。久きま。手なみ
 見やと。大長刀とひらり。て。敵の真中へ

ころて入鞍手結葉十文字縦横无盡にかけやぶ。火花と散して
 戦ふ。駒の足をま。鎧のの物か。と。火雷神のわれ。ま。勢少。組んとり。兵の鎧乃
 揚巻く。杖五杖をり。其人礫ふ。其の礫乃
 四五人つれて。川中へ。ま。敵は不横合
 より。矢を。散。小村より。貞直これふも屈せ。ま
 射らる。矢と。切落し。逃敵と。其の姿見。ま。ありて
 弛ゆ。川霧立。ま。其の姿見。ま。ありて
 山風霧と吹らる。貞直。又。来るあり。馬も。ま
 ながる。ま。立。長刀と杖。足も痛手の
 あり。ま。矢と折。枯野に。冬草の風。

隠るるさ廻るいふとくまともひるふ。地藏尊の背後のりり
 暗き廻りあつしき棺桶一つありて。うら卓圍とあり。これ幸ひ
 人の氣のつらぬたかられ明りとかひ。繩ととれ蓋ととれ。死人を
 引ひいて仏坐の下の空を。所おかしき。あれ生子と抱き
 あぐ桶のうちふちとらりて。卓圍ととれ。息とこして居る
 ちり。あつしきも百姓とかげき者四五人。道心坊と前小立。或は
 寧堵婆と持のふ。櫓の枝と提念珠とつまぐるもありて。此堂中
 へ入かの棺桶とひげゆんとて。繩のとけあひつら。やど卓圍を
 とうのけさぬ。劍太の敵おえつたれ。とあひ運命のつとて
 所とかりひ。桶のうちりとりを。片手あり生子と抱き。片手あり
 太刀の技。切んと月あつし。道心これととれ。且さる。鬼を

じま。亡者。さや。幽霊。ふりて。ととく。あひとさけひて
 のけさまふ。倒り。百姓。とと。皆持。基ど。り。尻。饒。つ。と。と。り
 ことあれ。人。と。あ。ひ。さ。れ。体。あり。劍太。い。ろ。と。と。と。く。見。ふ。敵。兵。少。い
 あつて。野。辺。も。ろ。を。我。者。等。と。お。が。れ。を。太。刀。と。鞘。小。と。あ。え
 いて。汝。等。も。ろ。く。い。ろ。を。我。子。細。あり。此。桶。の。うち。小。ひ。く。見。
 居。り。と。い。ふ。百。姓。と。い。これ。と。聞。こ。や。ろ。く。人。と。あ。つ。さ。俄。小。強。く
 かりて。ま。ろ。手。あ。つ。り。や。ろ。汝。何。等。の。者。あ。れ。た。他。の。棺。桶。に。と
 り。も。あ。り。居。る。我。く。ひ。つ。肝。と。つ。さ。と。も。と。亡。者。と。い。ふ
 いう。ふ。ぞ。と。腹。立。け。ふ。を。劍太。り。く。亡。者。い。ろ。と。あ。隠。お。ま。ね
 ま。が。汝。等。い。づ。の。者。ぞ。と。い。ふ。百。姓。と。い。劍太。が。あ。り。を。な。ろ。く
 見。ん。を。裸。身。小。鏡。と。着。太。刀。と。帶。と。れ。又。少。し。こ。い。げ。つ。さ。言。と

わうとあてのりく。我くもりこの山一つあきふ住者ともある。今日
 此辺軍あらんふひひなど。此桶の亡者へ村む名ふ住。独身
 の小百姓ふて。今朝往生いせしゆ。日暮る此所と、烟と
 あさなむと。かりふ此堂中ふ入あきとらふ。此辺さぐて戰場となり
 て往來ありぐされた。かこの山道とさぐらる軍卒あうくともり
 とまうし。此ふ来りゆといふ。劍太又いふやう。かの山のあきふ住
 者あしべ。故相摸入道殿の侍恩と受けられ百姓どもあはし。
 わり我の故入道殿の家臣大佐九郎貞直が郎等なり。此
 生子へ主人九郎殿の子あり。九郎殿の今日此所を打死しゆふ
 我の主人の遺言ふまを。此子と抱きて落行んとかり下りて四方ふ
 敵をたててのれ行べき道あをせんさぐ。此桶のさうり隠

居しゆ。故入道殿の侍恩と忘さる。かうくともり
 さやけた。百姓ども口とをく。さて左様ふけ代へ入道殿の侍恩と
 うけられ我くられた。いそ作と背くべきといふ。劍太あはやく
 仏坐の下より亡者と引出し。鎧とぬいで亡者あき。かうくせを
 まさ長ば百姓どもへ打つかづき。堂前ふさてありし陳笠と長刀
 とひらひ取り。まが笠と亡者あき。卒堵婆と横ふ亡者の両
 手とくにつけて。長刀と杖ふつ。一人の百姓さつひら。いふ鋤平
 これえ。いれ武者がふあしむやとくを。いふ鋤助がゆ通り
 馬子ふも衣裳亡者ふも鎧とや。ととも薪あてまき死骸土
 かけりの身でかりふも一騎の武者とあり。百姓の身でまきとや
 鎧と長麻幹の杖ふさうりて。長刀と杖ふつ。死花咲せお役

立ち合ひ仕合せのつばやれに。松の木おしとけけとかけを。劍太を
 裸身ふ太刀と見たまき。生子を抱て桶おらかり身をかくこと。
 百姓ともへ立寄り蓋とわひ。繩うげあて卓圍とけ棒を
 とりてかけつれを。道心坊へさたふ立。鈴とあしし経と讀つ山
 道とのせそ行多ふ。ひしふ群る鎌倉勢。それ落人よしひりたし。
 ちく来るよとく見と。まあまられ落人あわぞ。さたやとくしり
 けく通りさ野辺かりの百姓ともあり。戦場ゆく棺桶へ見ると
 いまり。どりく行とつれ顔と背け。道とみりたて通しつれを。
 桶の内の劍太へと申し。よりとあひ。まらふ生子の泣きも神仏
 の擁護あらしとくひね。百姓ともい足とあて過去ぬ嗚呼生子
 われ者なり。生死流轉も一時不修羅の街を騒し。さく此しとん

とそ。黄昏のころまで中かの暗くまらる。こまふ鎌倉勢馳集
 て。松の木おしとけわり。亡者ともあふえつける。大佛九郎が
 ちくした不手どり。臆病神のつとれ者ともあれた。あらくそ
 ともまど。且評議しつれつれ。あれん。松と小どそ。より長刀を
 杖よつと。大手とのりけと立ち。大仏九郎が即答けさひあ
 彼奴もあしとゆる者。立合の勝負あやまら骨攻とん。り。
 遠矢ふけて射殺せとつれ。矢がとぬとつらて射らる。矢雨最
 の降かふひしつれ。いけ射て身ぶらたせられた。哀や彼奴
 へ立ちまらる。いそく。首ととりて。手柄おせんどのみ。我先
 しあしそめく。組んしりらく兵の。肩へごまらとさあ。亡者
 とうとさぬと身とのゆりて。唯一打と斬つらぬ。血さ人のさる

死骸^{シカゲ}もろく亡者^{マウヂヤ}の生るが如く。くろくふうのくふ兵^{ツルヒ}の背中^{セウチウ}もどろろ
手^テいざうく。ヤこまやうり。呼^ヨりつ。さらふる手^テさ死^シの冷^ツこ
ふも。心^{ココロ}のつる臆^{おく}病^{びやう}武者^{むしや}さらてもついてもひるまぬ亡者^{マウヂヤ}うち物^{もの}
業^{わざ}やうかきふまどと。大手^{オウテ}とひらけて組^{くみ}つけた。こるこも加勢^{カセ}う
亡者^{マウヂヤ}と相手^{アヘ}。えづかざれつ多^{おほ}く声^{こゑ}操^{さく}合^あひるじふろくろく。亡者^{マウヂヤ}の陳^{ちん}笠^{かさ}
地^ちふ落^{おち}り。二人^{ふたり}の武者^{むしや}へびくろて。よく見^みれを髪^{かみ}と乱^{らん}して色^{いろ}くり。
額^{かぶ}ハ三角^{さんかく}の紙^{かみ}とわて経^{きやう}惟^い子^このくハ鎧^{よろい}と著^きく居^ゐりるれを兵^{へい}はら
あれたとて。是^{こゝ}ハ正^{ただ}しく亡者^{マウヂヤ}あり。千^ち釵^し破^やの城^{じやう}れ藁^{わら}人^{ひと}形^{かたち}捕^{とら}へ死
の謀^{まう}計^{けい}ふのそんれと。わく矢^や種^{しゆ}とつみやうるる布^ふささるとんて。所^{ところ}う
ひく一^{ひとつ}兵^{へい}ともい共^いと笑^{わら}ひく一同^{いどう}。陳^{ちん}所^{しよ}とて飯^いりやんぬ。
○かくて東^{とう}西^{せい}の山^{やま}くは吹^ふ立^たる揚^{やう}貝^{がい}の音^ね幽^{ゆう}谷^{こく}郷^{きやう}言^{ごん}ふひだれてとてさぬ

しく、あちこちハ散^ま在^{ざい}する兵^{へい}とも。おひくハ集^{あつ}りるれを。總^{そう}大^{だい}月^{げつ}
影^{かげ}个^こ谷^や判^{はん}官^{くわん}甲^{かう}曾^{そう}養^{やう}ヒく馬^ば上^{じやう}て。歩^ふ卒^{そつ}ハあまこの明^{めい}松^{しやう}とて
し。知^ち具^ぐ麻^ま川^{せん}のくろくそて出^い来^きる。諸^{しよ}軍^{ぐん}の戦^{せん}功^{こう}と賞^{しょう}をいん。
家^か臣^{しん}山^{さん}咲^さ庄^{じやう}司^し雪^{せつ}森^{しん}馬^ばとてりてひざまらま勝^{かち}軍^{ぐん}のうろくハ相^{あひ}
のぐ。わるとり。由^{よし}庄^{じやう}司^し部^ぶ等^{とう}南^{なん}方^{かう}十^{じゆ}次^じ兵^{へい}備^びといハ者^{もの}南^{なん}朝^{てう}の帝^{てい}
相^{さう}模^も次^じ部^ぶハままりされ。日^{ひつ}月^{げつ}の涉^{せつ}旗^きとてひ取^とり、弛^し来^きる。やうく
さうけく主人^{しゆじん}庄^{じやう}司^しハ後^ご一^{いつ}ハれ。庄^{じやう}司^しハこれと判^{はん}官^{くわん}ハとてまら。判^{はん}官^{くわん}
これハちをておのめなきを病^{びやう}ハ陪^{はい}臣^{しん}なれとも十^{じゆ}字^じ兵^{へい}衛^{ゑい}ハ大功^{だいこう}拔^{はつ}
群^{ぐん}ありと賞^{しょう}養^{やう}のあま。朝^{あさ}鳥^{とり}とあけされ刀^{たう}と手^てづらうさうりる。
十^{じゆ}字^じ兵^{へい}衛^{ゑい}ハ面^{めん}目^{もく}身^{しん}ハあまらあまらハ押^{おし}戴^{たい}て帯^{おび}うり。さく判^{はん}官^{くわん}も
陳^{ちん}所^{しよ}とて飯^いりやんぬ。とてさうの臆^{おく}月^{げつ}も。明^{めい}松^{しやう}の光^{ひかり}もふけとてさ。

又世已系二二

馬のいやく声えのさゆしくぞおがえなる。山咲庄司もかてて馬一
打系十字兵清等と率く後驅とらうりなる。忽颯と吹らるる
夜風ふつとく。一ひらの文虚空よりひられ落と。庄司ヶ兜乃
鍬形ゆそりまらる。是則かの矢おとあり山ありふ吹かされて
此処お落さるらん。庄司いこれとら。十字兵清が明松とらうけ
夜露ふちありて讀ぐと死と。うらりして讀とら。何れ心お思案に
打らうりさ。行列打せとくともゆえぬ。

三 蛇くんと竹ばかてらー老女の懺悔

さて時光のどどぬし。水の流る小異かきと。金鳥玉元乃足
いらんや走り。一夢とらうりの間、十歳わまりの星霜と経て。そそ
応安三年あぞいりる。此と死相州鎌倉の小動といふとてあふ

駕籠の塵兵清とら貧し者里とられて一口家と作て住たり。
くへ古き歌ふも。こゆれきの。碓の松風音をれた。夕浪千鳥とら
さうりたり。とらるる所まで。浦りり管家をれた。風いともくりのすと
く。浪の音松の風常ふとらるる所あり。ゆき風駕籠の塵兵清
とのいひうら。ゆきせうれを。常ふ此鎌倉道は駕籠とゆいはいで。
往來の旅人とのせ。とらうの賃錢ととりて。朝夕の煙をくけらる
ゆき小異名とらるるひるあり。これ今年齡三十七歳ふ至妻乃
於破矢といふ一年ハ夫ふ二つまらりて四十歳ふり。前の夫を
楽人といひありゆきか。のうら舞とらうひおびえとら。今も諸社
やとられて。神樂とまひこれと活業のしとけしと。子ハ男女二人
とやいひぬ。姉ハ名と小蝶とらひく十四才。弟ハ蝶吉とらひく

又世已忘之二



又世已忘之二



これぞとて此方と云ふまゝのやうな。塵兵衛を森ひて。さう
くれば都合よく。つぎつぎと駕籠とりておしひられさうの
借物と論じてやうくさう。今ハ何時もやと同し。塵兵衛日
とあふき見と。いまま末の下ふもいりんくくふ。幣又も
ふ此松の影異ふくうたて見れん。いふも其ころふりんと
かのさうの打うかづき。日トトのころの旅多れん心いそ
随分いそげとらひつ。駕籠ふ乗うつる。前棒ハ塵兵衛。杖
幣又ガ。烏帽子白張宮奴の形もそぐいぬ片相手。我肩ハ下
きも神輿とぐく肩れど。駕籠とぐくも。讀と歌酒代の
銭とかりもそとつふやれ。うさわける旅。駕籠のき吹込
沙烟コサコササツリやうさやうささしかけ声も。足もさう
田士

三里七里の濱の波打ふんと。千鳥がけふぞくく。ア行ぬ
○宝珠塵無堂宇。腸度絶容数百人。と萬里居士乃
つ神とれ。鎌倉深沢の大佛のうらふ。人あま。群王物を
くもそ立ち。釣をれ箱牛あふ童。碓菜つむ姫。貝も壘乃
さぐひまぐ。旅人まぐふ押合。我きたとかいわけぬ。こ
何と刀入れを。白髪とつてく。旅の老女。礎み尻け。りん
あ。ろの笑と菅笠とく。竹杖ふさぐ。やと
居る狐刃のなま。此旅の老女。ありて諸人ふり。妾ハ
身の因果物語と懺悔のうらふ。諸人く。せまき。妾ハ丹波
の國の山奥。住獵陣の妻。あま。ま。娘とふ。憎とて。平日
身上と撮。あま。うら。り。れ。ま。娘。谷川

又世下

七三

